



特別
~ 12
1077
28





利
1077
2708



12
1077
28

箏火

正六歲

豎双也

源中將吹笛事

篝火
六六
篝火

篝火 以詞并歌為卷名

四五並一

河卷名 源氏守

かゝり火よ立々ふあむむたきつこと

世よふあゝせぬりのなるり節也

私名守玉うり守

たねをたねにたよふちちてよかろ火此

あかりりてあらふ相とあゝん

詞所あれかろ火のすうーさうーさ

ちろ火ー

又いとかけすーまかろりや

うけらあゝきてー

秘 卷名心洞并歌号く源古六蔵林
此始の事く 豊並く

あはれ世乃人のこくきよ

秘 近の君乃事成安て源乃事く
心乃始末と近の君乃事く
子里とゆきん

美 世上の口遊よ物乃おくきよめ

あはれ近の君のゆくと心乃源氏れ
分別よ内大はれアツカじ不足たれよ
ツのあやん

秘 ともあましくもあま

よくもあれあくもあまき女子あ
らうらよあそとく人まると女池
殿よあつを給よを給へくさうと
源の思ひ給やん

義
内大臣は女トアハカラの美人の如
き人なりまゝに

かへりて

義
義曰いかんか

一 福のつたに不肖あれども親
に志しき子とありて

南一 義事とて

かくんよとつひは

義
おのりてカラ又人

さぬはきつ女御殿に歴々の中

しおし人ノ嘲嗟

ゆえぬ

義
分判ノ人

内大臣分判の

まゝ

いし

義
是より源氏ノ推尊

義
内大臣ノ性

をれい又やういあふそと源を
内府成りしきくはよる人
侍とさるく

内大臣の金比ひこ
ゆりまのくともあつひと

よくかひそともあつひと
よひよせはよる事これ遠くは
と源れりしはよる人
ふりく

内大臣の姓氏授りて源氏乃
推すよひはよる人の

よりののりそは
美田世同と一切莊敷やうたぬ洗や
人を非忌をたしはよる人つと
志物やうりて建立したる
と

いとわく
近江若ノ事成源の行はとく

かたはつげても

箋

わろくはく

紐目

うーはろはつげてもさあしんあはく
まろくはく

近江君の事とゆへ申ておろ
ろはろはろはありろくろくろく
ろくろくろくろくろくろくろく
ろくろくろくろくろくろくろく

右近とゆへ

或右近の事とゆへ申ておろ
ろくろくろくろくろくろくろく
君ろくろくろくろくろくろくろく
ろくろくろくろくろくろくろくろく
ハ又ハヨシトホモヘキコユルナリ

紐

源のほはれありろくろくろくろく

ろくろく

箋

源のほはれありろくろくろくろく

ろくろくろくろく

源のなげほり

何くくさる

源のなげほり
ありはなげほり
はなげほり
はなげほり
はなげほり

風すく吹つてささる

河風河美六松の葉くくけい

衣はすそめうらら

松美河ノ川舟美及美スセコヤ衣ト美

一葉は花約よる

我せこくろ海もはすそ吹を

くくろくくろくくろ

弄云花初之毛ノ字ヲ

美曰初風ノ川舟初乃前後結

毛の字ハ我モ人モノ心

何くくあ

和琴へ 秘目

仔細と志をく

教多ひくくのちく

又六日

あつむいふとヨムへし 梨同

折ふはくよふとくつりて

折りしうき折し

葉のよとよとやうくあられがうほとた

葉の初よ初風すくくくとひて

取よ入かと風とひやうくたうゆ

葉のよとよと楊あられがうほを

あ

かた多しひあらんや

むうのちく

葉曰葉のよかうりり言らうくそひ

ゆーすうううううううううう

うしと難かへむううううううう

い北く

源乃をのまてあうのまへく

美ノ義正ニ就

口より好いおんそそ

秘 かつり好いんとそそ

以主人此かつり也

何 篝火

私常夏ノ巻よかつり也の多いといふ
こみこみこみこみこみこみこみ

右近れ多しあそび

美 河太子好監ノ叙爵シタレんヲ云

いそすーけおふをり水此をり

美

昇り玄篝火ハ必水ノ上ニ燒く火ヲマ

カニ清シテ涼シクヤマハク名也

美曰此美不實也かきりといふ

氷上トハ中しス

私多此かきりかきり

此れけりやう水涼しくなり

こみこみこみこみこみこみこみ

まゆん乃木れ

うら松はらうくーらぬ

^養篝火の臺に赤入くーメクお赤松

と云辨曰

^秘篝火の臺に池多るまられとよまら

赤入くーら松こ

^はうら松はらうくー焼松くーあつあ

入くーらあよーうら松とーらあこ

浮波物落しはら松のまらーと

うらつま松くーらあにゆひて

りあまのほくくーうてはら松とーら

松炬續松も

うー志を記す

あーあうまらてと凍ーあらん

あめよ御新れとまらやうに

ーらあこ

まのとはあーく

まうくまらあこ

あつりうく

源の心

多^細く人^細をうみて

源は^細知^細く^細終^細る

夏の月を^心記^心す

秋^心あれと^心言^心ふさあつさ^心は^心あれ

夏の月と^心言^心ふや又^心立^心秋^心の^心言

夏の^心言^心あれ^心の^心言^心と^心言^心ふ

秋^心の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

夏の^心言^心あ^心れ^心と^心言^心ふ^心と^心言^心ふ

見ル一申ニヤ

^秘私しくく一よほせうしたん

ホノ義とねく花多ノ玉用ノ所居ト向

中りみくや

^原かり中よ立まよよ悪れきありこそ

^秘世りハ中とせのほのがうまれ

わあいまいり中よまなとう

^多まふとく何うにんねやとく

義同義大ノ常ノ烟トナんねノ我

胸ノ煙立ノヒツレトク止ト後篝

火ハヤリノ消スヘしらう下のえ消ス

一キ期ノ十キトク

い所まそとくやゆとよかまうととも

^向夏あれハ金とのあとあゆ解のあ

いけまて押身トりえよせん

^秘川の夏あれハ一とあかと是ハ

下よりあとく向一とく

^多夏あれハ宿一一秘云是トりえ

わさくさくさくトキ

葉曰わさくさくひのまソフれ蚊をテラヌ

篝火モ若し中下りえト如クテレ

是ハソク子限トヤス(キジ)ノ

以テテテテテテテテテテテ

イハニ如クナルト也時節ノ初結ミハ

蚊を大ト云キモ此ス即チノ夏カ

進ハト治定シタル不ソノ月又ハ

ト云ふありてイハリ上ノ初

夏此月ヨリハトソノ今紙拾メ

互ト云ハオレ事ノ分明ク夏ノ初

云出シテ物ト云ハテテテテ

レハ神ト云

女系

玉

あや一此ありさ

玉

也玉等
ハ

ふりりふりりふりりふりりふりり

篝火の焼くせいのやうなやうなやうな

お〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

き〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

か〜り〜火〜を〜焼〜く〜せ〜い〜や〜う〜な〜や〜う〜な〜や〜う〜な

ふ〜く〜ふ〜燵〜と〜あ〜ら〜わ〜る〜と〜あ〜ら〜わ〜る

篝曰篝火此燵は空穴よ之はあつた

モナリノ清の物也ソレニ立そあ燵あ

く清也スヤリ又アヤ也常ノケサウノ

燵言ナリハハハ燵ニ燵ノ燵ノ燵ノ燵ノ

燵スハキヲ玉ウ〜ハハハ燵ノ燵ノ燵ノ燵ノ

燵燵ニ燵ニ燵ニ燵ニ燵ニ燵ニ燵ニ燵ニ

燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵

燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵

花云篝火ノ燵ハ立のつれハ清の物

ソレニ燵ナリハ燵ノ燵トテモ燵燵

ナリ燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵燵

篝曰花ノ燵を燵燵燵

いそ十うハ云界ノ意ノ煙ト見ルヘシ
玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス
人のあや

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

くろく

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

^如玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

玉ろくたガニカケテハ見ル(カラス

松三斗道遠業等に吹ありせり

出り

中将乃まゝ此あさうられまぬとら

^義 義曰父吾の朋友ノ事人

^或 源乃詞と

源中乃あさうらあさうら

^伊 柏木人

^義 義曰柏木ノ弟ト安定ノ弟ノ

堪能ノ人トは人ノ弟後、甚大の徳なり

吹る人ノあさうら

吹る人ノあさうら

^義 源乃弟は棟義と名く

源乃あさうらあさうら

^初 源のあさうらあさうら

義曰源乃り源清是と名くあさうらの

源乃あさうらあさうら

源乃あさうら

源乃あさうらあさうら

^初 源乃あさうら

源乃あさうらあさうら

皮内太呂和琴を双此とよこしり
又此のうらた君やと和琴とむく
より一日みまひり

^箏和琴 ^辨曰

かひりまかひりむさゆり

源乃ひささき

源中乃をくんりきさき

^箏夕音く ^箏以波始り源中乃ト書之

盤涉調高調子之箏曰風の音柱よ

如よきりとまき六ゆれ第乃和ト

いへル盤涉調ノ事ト字工佐ニテ

更ニ盤涉調ト書ク凡ハ風乃音柱ト

云ニ由緒アル也

中人ハ以中乃ノ節ト申コユコハ又夕

音ノ節ノ箏ハ誰人ソマ

和盤涉調と箏ニ高調子トイへル

高平調高調子之思忘ラシ

又ルへし

双中将公此ひて

箋曰

出^レ多^クて^レう^ラま^レる^レ秋^ノ曲^ノ事^ハ在^ル也

箋

柳木^ハむ^クく^レ此^ハ方^ノ正^シハ^レ心^ケサ^ラフ

在^ル也

并少ゆひやう^ハう^ラま^レる^レ

箋

紅梅^ハ先^ニ双中^ノゆ^レノ^遅キ^事也^ハ少^クゆ

う^ラま^レる^レ并

志^ハ好^ムひ^ヤう^ハう^ラま^レる^レ少^クゆ^レ出^ルる^レ海^ノ

い^ハゆ^ル

箋

花^ハ云^フ寛^平子^ノ御^記平^利也

桓武孫^ハ皇王二世孫

皇后^ノ身^ハ

聲^ハ長^蟬守^リ初^ニ誤^ル秋^ノ虫^ノ嘯

葉^間親^聴曲^調宛^如松^風之^動曉^後爰^葉

閑^暇取^ル令^飲与^得青^鳥敷^子行^并綾

羅^衣裳

今^葉う^ラま^レる^レ少^クゆ^レ虫^ノ事^ハ此^ハス^ハい^ハ此^ハ死^ス

而致了りし秘私云左方加朱ノ字等ハ思入今也

私云左方ニ加朱ノ字等ハ思入今

加之

昇云あり社ノ部ヨキ虫た在リ下

一又凡ノ

以上等

秘花ノ説ニ及ハリテ却テ之ニ出ルル也

之ニ及リ

以云々申およゆつてせ給つ

多れを志さゆと祝し給ふ

め秘所ニささ給りるを此

院の石継ちり親王家一も

してめしはひりふちり

と給りハ石殿の舎人之

西宮抄院宮雜事中御随

身勒夜行石継奏時云

今案親王家又有石継式部

卿重明親王嫁娶し時石継

以下錢二百と縁とふふ
かの紀よみくまり句文は
しられよあきくへへ又知是
院禅周の西行子うへる
縁と具と事しとらうへ
と祈りしとふ所既め舎人へ
名家^美の禪とられと云也院親
まろねぬめつよと持家以下
乞とつとつととと

秘の書あやまれくは
ふらりくあつされへ
は書絶へへ
されとらりくくは
いへるける

物終の作志の筆法也は
乃事しとくへへ
くく
私けふくくとつり

記

李部王託天曆二年十一月
廿二日丁卯奉詣右丞相坊門
家娶公中女廿四日夜更漸
深向右相府亭所入東南
對廂東頭西向設座以朱臺
六臺及銀器并饌女臺一
雙器并饌菓子木安座右其
西北對設容座主公傳侍女告
備饌由即出就座兵衛皆

師尹卿右出門皆師氏朝臣
相次加座以折敷饌在少將
藤原朝臣伊尹以盃酒安臺
酒巡兩三行即入着中侍女以
一盃餅安莒蓋羞之公主率
客卿起就別筵命飲深賜
陪從者祿五位三人白單
細長各二領袴一具六位有
官散位四人各同細長二領

無官之人白絹各一疋正純以
下錢二万今案女裝束ハ尋
常の裳唐衣也 細長ハ貴
女者着し物也故ニ別リ是
とそゆるハ三重カケにて唐衣
ハ中倍あるハ細シクハ腰ハ
小腰也或白或地摺或村濃
亦有老異也

中細言及ハ西せんのみりふ

^秘物沈の誦語ヨリをり

うりてうらるけいそ

^辨薰のうりまうし目くゆし

^美意此亭あての事ハ

衣のうけて飾あていふ

^美是らりかろしひ事のは乃

やうしきりきり流し

君ハ入てゆしひて

^秘意ハ之条文よりりりり

昇
蕙の三条文へゆりて事うり
三条文よゆりうりふり
いまさみてすこ
死
蕙のうりゆりてし取の儀成
心うりるるる

昇
こあけおふ
何とわらふゆさ
うら白文のゆり
あゆりふり

いふまじぬあふ

昇
夕音あふこめて
年の祈

けおまれそし
秘
蕙も女子をり
こそそそ

昇
ゆよにえまのせ
白文
あも糸うん

宮へ行くはまゝとふさふさ
ひらめく源中納言おととし

白文おととし
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

兼
兼

あつあつとふらふら

梅窓君のゆと窓へていり

とみあれとめきん若ととれ

開川會坂買川 寛平菊

合よあり

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

あきらめあはれ

梅窓君

とま

水割よよせり

あきらめあはれ

下乃あはれ

花

あさくしとんのみか〜雲川の

くゆかぬあ〜しとそらふ

秘 意の奇く

清くみゆるとよとく〜く

下流のぬゆま〜とそら

か〜とのぬんあて〜た

秘 奇と〜とりて〜茶子流〜く

らり

海〜の〜き〜ら〜ら

秘 意の祠

あ〜らま秋の穴の挿く

〜ら〜き〜とれおぬほ〜く〜ね〜

秘 意の事とらり

ね人よ嬉〜く〜えんらり

事とこのま〜く〜ほ〜く〜ん〜

〜始つ子と〜し〜り〜花の〜後

の〜し〜れ〜ら〜や〜ん〜ら〜ら

ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

と情さういふはなれ

あれうらよ世はそしきうらるるえん

市々

女と女の情さういふはなれ

秘 一集のうらり

董也いりあれひらに女と女の

情さういふはなれ

秘 一集

白文巻いひはあり

文の女君れひらんさういふはなれ

秘 白文けい先て六君はんれ

秘 一集

松畫人うらり四日女は事

とみゆ

おひささよれがれ家

是より六君のさめしうらり

とみゆは二とみゆ

かさうらにあらぬあはれ

受
かこるりよ不足成りたる事也
きにおやよしの事

受
夕雲の自慢むし

あ
人乃おやの事

九

あ
あきやうつさうの事

受
是より中君の事

あ
あいの事

受
中君の事

物乃
物乃の事

受
六君の事

か
かこるり

受
六君の事

く
くさの事

ま
まの事

受
結核の事

白文の事

心え
心えの事

花
そこの殺しこめしに事

簡略しるを

好殺

そこの殺也これん

うらうらうら花鳥流管略

云儿いり

私あまり

いそいそわ事

と殺しこのこそと云

こつてあつた太ひあ

松
雪井の宿力事

松喜の女御のり

えん所

白文とり

二条院よえんや

句此夕音の六条院

して申る人遠く

南はすらよ

花

六条院の南に中らるる白文の

りしすしきひしりしきく六条七

六条院より十人々々て 昇

是の世との伝はひしりし

白文の伝はひしりし

くらんとする事とら

中表の心へ不肖な也

中表此心なり

しりしきく名所ちりしりし

白文のあまのりちりしりし

ろと也

うしりしきくす

何とすしきく名所とすしりし

似いそ志のひしりしりし

中表此心なり

あつちよりのしりしきく

あつちよりのしりしきく

しりしきく

一日此ヒトよりいふより此つて人をきく
又の詞八文の弟之をいふ
と蕙のつみくさうひ
て昇昇箋

松法事此よりいふ因縁
中君の中よりいふ

かゝれ心心のうらみおし
蕙蕙のあはれあはれいふ
あはれあはれいふと中君

いふたつていふ

是是の蕙の八宮の事と
忘れ給うた
とつて花鳥の流り

いふたつていふ

いふたつていふ
いふたつていふ

いふたつていふ

たゞし〜ははは〜
其の字は〜
〜
〜
〜

和紙又昇乃始の義

宮内少輔の事

八文の紙事
〜
〜

〜
〜

二連ト〜

常〜

けね〜

あり〜

あり〜

わ〜

宮内少輔の事
〜
〜

^松 薫れんく白ハ六巻そるつ
くろ成く

おひとこりけつ伝

^妻 白此中君ハ珠をうらばさ
悔急り事し

うをく白りぬ

^秘 薫のむらり 夫ハつのも事

くろく書し

一日のむらりくろく書し

^秘 ^哥 ちのり此宛薫の事

文の所忘日のりみく大徹

しと

^花 花 ちのりや此所忘日に経伝の事

ちのりちのりちのり

事しちのり

それち中君此所忘り

ちのり

必所

西へゆくはなはたさへ
是の世の又乃也と視て
志はひゆしとささひゆくふやう
情は此のひめて

ねはぬとすははすりより
中へ入るは路のゆき
さよとゆきよとまはし
のこりてゆくはなはた
うりてゆくはなはた

ありひ一旅ふとせ 後

^舟 舟とゆきと志のひらき
うりてゆくはなはた
るやうとゆきと志のひらき
うりてゆくはなはた
あふらとゆきと志のひらき
あふらとゆきと志のひらき
あふらとゆきと志のひらき
あふらとゆきと志のひらき
あふらとゆきと志のひらき

紅

おれ又よはくのさるる

らとあり

養

中よ志の初成うけそら中

そく隠ふを云と思ふと世

のふ妙と曲ありと也

和茶よ花鳥よ志うされうふ

を絶く一皆其心也

よあけいふさうかひて

養

ありそやまんとも也

すくよらに

意の實ちる性也

こそ又内田又つこそ

養

又のあり一翌日の夕也

いよあかりそくつ家

養

茶の焼くつりいあまの杯

あつこしと也

丁子そめ此麻乃

養

府よ丁子の志う成めふ成し

秘 上のつこののらわり扉ぬく——昇

女君もあや——らり——よの事

秘 宇流みそり事

秘 さいわい——志ろひ——事

さうあ——と——りり

秘 事 事の代し

かわらぬ——この事

ら——人乃西わりの後

秘 白く——ぬまは——

何事し——い——あ——らる志

又ま——

ち——と——み——あ

ら——事——あ——

考み——の也よ

秘 い——に——す——け——

私このあよ——あ——み

の外ら——あ——

つ——と——り——

秘

薫の初こらりぬしくいふこと
とよの初こらりぬしくいふこと
やういふあはれはこらり
まごふはゆきせらるる
はりあはれこらりぬしくいふこと
事とこらり

文とらぬまはこらりぬしくいふこと
はりあはれこらりぬしくいふこと
こらりぬしくいふこと
事とこらり

らとらぬまはこらりぬしくいふこと
はりあはれこらりぬしくいふこと

まごふはゆきせらるる
はりあはれこらりぬしくいふこと
こらりぬしくいふこと

はりあはれこらりぬしくいふこと

秘

中君のいふこと

箋

かみのこらりぬしくいふこと
はりあはれこらりぬしくいふこと

一日うきうきとくさくさ

女 中君の詞

花 宇治のあまのこゝろのしず
乃らむはなはなをのこゝろ
とちてはひまのこゝろ
やわらうとちてはひま
てちてはひまのこゝろ
はなはなをのこゝろ

花 是のあまのこゝろのしず
とちてはひまのこゝろ
とちてはひまのこゝろ
とちてはひまのこゝろ

女 退 ちてはひま

女 若中への奥のこゝろ
いとくさくさくさくさ
花 若中の奥のこゝろ
いとくさくさくさくさ

女 若中への奥のこゝろ
いとくさくさくさくさ
いとくさくさくさくさ

とあへーとみほり大おまをれえほが
とふりつらふそのほり洞くまひま
とらおまをまよはらうまひよれほま
たふことしひの大ふれ事くいまは徳氏
君乃家乃よりひてのほり
二の巻よまき物乃物くうなまひ
た終事なるもの
説者云愚乃字と万葉よハとれと
訓よりりそのほをもちりりり

秘
いよよ叶ふを

秘
これハ癡字之帯本巻よまらきり

大将乃つまきう一語ハ家

秘
け法師よ不四とく一語よく

とひまきてとら

御師乃大内記く

世乃ひら物あき

秘
せろくちうらと色ひらぬとほくま

人く

ぐのほしちりしゆらぬし

文孝にりては論曲よならぬ世不

過りゆく

此語よりぬるありて

源氏物語へより考へ此語して師より

語りて

ふらちちらに才と久しかり

源氏物語よりして世に伝へるは

たゆみりありて

弟子地へ

大^{タリ}くよほりり多日ハ

寮試の日とりせ 秘日

まきしきんよ

秘 大学寮の門へ

くさざりの若れ

秘 夕宵く 冠者ノ若く

ふか海まりらひよはぬと

何やーいふはぬしかりきよよ

中へ夕霧れ不_レお_レ意_レ成_レく

され未_レと_レか_レく_レと

秘 学生ハ以長幼烏席とし_レ今_レ乃_レ之

秘 察_レ武_レの_レ時_レハ長幼_レと_レて_レ席_レと_レり_レて

人_レの_レ性_レ性_レハ_レい_レと_レ放_レよ_レ冠_レ者_レ若_レと_レ子

生_レと_レと_レれ_レ未_レ度_レよ_レ列_レの_レ之

秘 あり_レて_レ又_レた_レり_レお_レ一_レ家

秘 制止_レと_レく_レり_レあり_レと

す_レら_レと_レと_レせ_レれ_レみ_レと_レて_レ行_レけ

夕霧れ_レの_レと_レ満_レく_レと_レく_レと_レ此_レ作_レ法

あ_レを_レ膝_レを_レぬ_レく

夕霧れ_レの_レゆ_レれ_レは_レれ_レと

只_レ今_レ原_レれ_レ由_レ與_レり_レよ_レて_レ夕_レ霧_レれ_レ今_レあ

へ_レ一_レ一_レが_レけ_レく_レて_レ我_レも_レく_レと_レと_レあ_レさ

秘 正_レ人_レお_レり_レと_レ也_レか_レと_レあ_レり_レ上_レ中_レ下_レ

原_レ氏_レハ_レ八_レ将_レ子_レ院_レ者_レ氏_レハ_レ勅_レを_レ院

橋_レ氏_レハ_レ子_レ館_レ院_レと_レと_レと_レい_レつ_レま_レせ

と_レ子_レ同_レと_レと_レせ_レ約_レり_レへ_レき_レ心_レん_レと_レり

りんめんぎいほう

何 何 文人擬生

金樓子曰一此中端我之

今案文人ハ文章生まざるハ擬文
章生してて文章生し小擬とる之武ハ擬

進士云し

花

史記立條の中に三條以上あるを
擬文章生し補すなり

秘

進士乃弟之花多よくりくまらぬ

大教と何あてしんふ之方略宣るを
かりあり人ハ存れ文章の生進ま
て國より進まると擬文章と云
之文人云いざりといハ此事之次第ハ擬
文章之は以後行幸の時出され試
問あり

因東坡ヲ傳フ前して試下三條ハ
王荆公カ又タルヲアリト云し
世掌事

夕霧れさきくかきくさかぢりれり
もろやく成くそれよ又いさよと原其
記も夕霧れし舟よ原をぬきし
原よそ細作又ふんたり

くせさいしととと取えり

原の飯中れさぬ

すて何事よと

是ハ孝子乃事よかきしと原其
と云く原れ捕作れしと何れ母
奥ありと云く

かくて后乃原れと 秘 之后れ

南代いましと后

兼宮乃女御と 秘 秋好

く宮と云うる事

秘 爲る云之方辨えれりとはまらふ

とたかりめりて

たささるとばけ釘

原の爲や乃く阿りしと我をひ

ひるぬ板よひひなりて

源氏乃くら志きり后よのねん

秘 河海花鳥よくりくくり

何 後朱雀院御時陽明門院三多院皇女中宮

嬪子 敦康親王女

两后共依爲源氏春日大明神有清耕

太神宮有清説宣事世事虽爲寛弘

以後夏卿可潤色乎桓武以後天下国

母多大織冠ノ清未也忠仁公以来藤

氏臣皆外家トメ必執政スル也

秘 右臺乃中宮れ後々東宮女御乃美

ふゆらふ事源氏乃くら川、き

とより必しと源氏姓と爲りて

ととと帝王乃の女とハミハ民ふと
公ハ友乃民れ后の中絶する事
弘徽殿乃のまり人なり

右大将乃の女齊宮なりとハミハ
内へ

大御さうさうふ心よせ

新宮か、弘徽殿か、さうさうと
何つふへ

兵り御高しきこゝとハ式つるさへ

業上又之桃園或る宮豊一とハ

或るつ調ふりて任し注如へ
并

一都ハ若狎る式るを親とてハ
ういやは兵り狎ハハれとハ宮せ

式アハハさうさうはさりさや

私ハ若狎ノ内中勢或る時親此

官トス兵りハハ大幼言ハ時兼任執れ
親まれ宮へ

かいありてはり

此女御まのり此事とあよのりまのり
たなること王女御

おのりことくを杖好ハ希訪れ出女也
是ハ或るつて親し出女うれハおろしと女
御之く源氏の匂よとろくこと

王女御

何王女御

朱雀院皇女昌子内親王 冷泉院 世号

王女御

惠子内親王 文能 嘉子女王 清和 兼子女王 日

忠子女王 日 寛平女王 日 班子女王 光孝

照子女御 朱雀院 徽子女王 村上女御

女王 村上女御 代明親王女

凡王女御よりキラス姓ヲ昔ハヨシ付也本力

王託ニ莫女御源女御ナトアリ

たろくハ所はか

秘 尚書と式了の宮れ女の女御と

よくことあはく事日

私式了卿宮女侍ハ萬雲乃流めい主上
乃流いとこ也

但秋好と相重乃みくも前坊と宛
才るれく主上と出いとこ

母きりあ

萬やねくをぬらりにと或る宮へ

小八内この様よぬ

梅はかろひぬ

秘 秋好と事

乃流いとこ乃川之

秘 故母とやと名ハ不幸小てる様よぬ

きく之幸人十九ト

おと太政大臣よ

源任相國也

秘 勅例抄ニスルコリ

白王子任太政大臣例

大友白王子

天智天皇中子

天智天皇十年程

太政大臣

高市親王 天武天皇四子 持統天皇四年 任太政大臣

元 内大臣轉太政大臣例

忠義公 兼通 天延二年任太政大臣 元内大臣

用白也 是より 好い連綿之信長公清

盛公 うら 内大臣より相國より任せり

大将内大臣より方より約ぬ

右方おれ内大臣よりおつり 是れ改

乃ゆりり より 是事のほま り 唐

それ 巻 より り へ り へ り へ

河 内大臣執政例

堀川用白 兼通 天禄三年十月廿二日内

覽同十一月廿七日内大臣中用白道隆

永祚元年二月廿三日内大臣二年五月内

内大臣 甲周公 正暦五年八月廿四日内大臣長

徳元年三月八日内覽

人 い と す へ り へ

秘 此以下大将の事といひ

の久きまにまけ給ふと

秘 柳巻より

秘 掩顔より

おゆやけ事い

秘 有職の事

いよこみ西子と

私云系圖より

とそいひ

秘 源よ

女々女清と

弘徽殿也

いほ

秘 雲井乃

いかに

秘 ちり乃

何 納言の

何 宮殿よ

むへ—— 師説めは

末摘花巻より人ととりりの方大捕し
何りそま縁あり海の物候共るまの
わうそとりけおらうか徳義物候うし
ほとけ名あり

花
致仕のおしこれ女一人ハ弘徽殿の女
母ハ二条太政大臣乃て若し二人や若
け母若しおんととりりこいぬハ梅家大納
言乃の北方へ

井
雲右乃うりこれ母誰とらう梅家
血筋ちより人如——系圖こ一加え
しひくは子とと
きしひくは南ふ乃事といふく

後乃おやよゆつらん

秘 たれまうらて ねのおやよ

又これよりせて又これよとせとらう
まし又よと人事ととり 井日

大宮あり

雲井れ乃とひくへてた又よ何の事なり

流るる

女郎よめ

秘 弘徽教し

女に所かりし文を作してはるる母の心をからるるをちん

大さく君をしりし和

夕音し

或は位をしてはるる者ト云トす

をれくしならむはいしてはるる

花

からしし比のまや夕音ト云トす

をれるるようららむはいしてはるる

秘

夕音ハ十二ノをしてはるる十四ノをし

りしむし

をしてはるる父ト云トす

おのかららし

夕音の心

けらるるよめ

父をからししむしとなくしてはるる心をからるるをちん

まにまのつらつらとまじりて
いふかたしむる

夕暮きせたるのけしきなるを
せしむるまゝ代

よろしくふりて

^秘 学問をて者よはれり

思ふことありて

かき書しむる

二人のまじりて

こがくはく

是しとまゝ代

こころのまじりて

^秘 大政を長并内大臣の御食

^河 大政を内大臣下新任御食事を

は御食をまじりて

前母屋の御食を

疾のうらみ風を

妹はれりて

うら凡翁下家

宮ひんうら川物下上す

秘大ふし

ひんうら

秘内ふ長河 舞河

う津が物信よひんうらん河の女はせん
うらそてあくまきうらそてうらそてあつ物信

後下う津うらあかん

比巴のよひなまふと也

まのあみことくれは海氏

秘なふくれとよひをかきん河あまふと
也世俗よなふくれかくれまほややく

いぬ初い何の字は訓と音とをいけ
しる初也それあふくれとよ初をふ
まてるふ親まふは海氏をいけ
しるうらふ比巴のよひをかきん河
初也うくと云初をふやくやとと
ふしかくうらまふしるる初也

おぼえはくくろのしりあ

^秘 明石上し

^天 大政ちトをソリこれとつろくわ
ま也

物れとよろのらまゆきと

^河 的る入の延表の四時ありと代とつる
る也 昇

^秘 前大まのひひりけいんたかろ

ゆいよまきしる也

かめれしとんことり

明石上の比也を源入はちあふと也

なげはらう物よ阿也

^秘 合養をせぞいとなわ

めろ上とひいしとひもわとひとさるう

よととれはあひ奇物ありと内ちた

われあかし

宮ふさぎ

大宮の比巴と取合し

ぢりあしとと

秘 なるめてをとも事をしり

再月

柱に比巴とてらうと云筆とて柱ガ

河 けりし月宮

柱さゆいをとも事や長巻

さいといよりりて

再 致仕抄政山方詞

秘 大宮の初明石とれいふ人女をとり
力ふさぎてと金つ

明石姫君をそのおとそ人あし御母
こゆいやはまを繁上(ゆつもろん
をさそをくをほちあつ

女いあふ公とせりわしと

秘 内木下詞 再月

女侍をきしうと何とと
秘 弘徽殿

にりふあふ

秘 歌宮の中まよふは路ふ事

秘 好ゆよをさしわらふとて迷懐をれを海
あり

ふのちをさしに

秘 雲井の居也 花月

東宮の元帳そくい海内事

秘 朱養院のゆき後よ今よとアヤ

心くくありを

き井居を東まへあつさんと田了こ

つうしあいにみりあつてききたるこ

秘 明石非若きしこいまに物大御

秘 明石中まをアヤ

明石中まねさなふをこよ

私かりしあしこいあさういさやいふらめ

石よとこいふこ

なひをいひあま

何 なひはあまの事なとやうの事也

秘 ちのほとにりしあふ心くまあふぬを也

國路へ進出くべし秘 若義持へ日
ありてあつらん

明石姫君入内ありて又人ありて

いふことありて内中長女を

これ給ふ

まことありてありん 秘 大宮司

おの家のありてありん

秘 忠仁公業後京氏いふありてありん

やうよこひいんていひて行き

きい

私大まのありていふありてありん

女御ありて

弘徽入内の事を祖父致仕攝政あり

りてありて行ひていふありてありん

かくそいひてありん

故攝政ありていふ今度弘徽致仕あり

理運ありていふありていふありん

ありていふありん

此中事少くそねがきかしくなすうたかた

^秘 源すすううううみあるうし

^私 大官れ公中

^弄 務政のお方と源と又なれたあうい

海を弘幸教女師の者よおねあす

よとこしうううみあす也

いぢありの世海

^秘 ぞおねるういひとけおめ

水うのさうわかん

^河 脚うのさうわかん下場さうわ取也

おふさうわかんわあわ感お只下を^{オカリ}

さゆのていし

^河 筆の取中や

官をかきわおりのふしと

秘

小のひて風乃らうきさうよりと豪
士の賦の公と思うよきでかきゆり心ぬ
くまにありうきさうより

真家士賦序乃初く 弘家士 其家士賦を
奇王固ト云人切小ほよりとあり
多り賦く文選トハ序ハかりシ載あり
此序ニ不足般系哀癯高ヤトソリはた
是故ニ苟ニ時啓於天理盡於氏庸夫
可以濟聖賢之功斗筭可以定列士之業

言遇時也故曰文不半古而功已倍之蓋得
之於時也執云此公ハ庸夫といや
考と賢聖の名あり又斗筭賦を
云いぬ文乃考もけいけい
又
又字子といふ一の人ハ半海で
さり人も切名のよとぬあり人れけい
考者ハ時れ思ぬといふ口今内
公と今海の務ト天下よりぬ
ひとぬれ立ぬるの事ハ時い

と思ひ行かへりて此句と補
活如くかやうに未の句と川合て見
ゆへハ味あつて云々 以上秘

或御説真家士賦一畧之雁門周孟
章君う取よ行て云孟章君天下よ
之くありととす乃の葉の凡とほつと
必むきくめて後ハちりりハるり
塚よよれりて孟章君の考貴とれ
かりのとていひてくるなる云々

まてたう是ハ孟章君一ありんれり
やハ雁門周く琴とてくハ女臣
くりーと孟章君ゆて家ハ前と
うゆふと云と又雁門周きとて
君ハ少のとるささうすうといひて
孟章君あうあへりてあけたは
こしりりありと孟章君うか
後れ事とかがりよと時眼ハ用よ其
時琴と雁門周くけよ一曲と後ん

私此短乃合せりハ新にくりハ略之

秋風至^レカ^レハ何^レセ

^何秋風集盤^ハ調津^ニ 弄日

私風乃ち^レけ^レす^レ好^レま^レ似
合^レり

宮はよ^クも^もも^も

大文^ハ雲井^ノの^層と^らけ^レる^ハ
一^ノは^レ乃^ハ和^琴乃^ハと^らけ^レる^ハ
又^ハ是^ハと^らけ^レる^ハと^らけ^レる^ハ
く^レと^らけ^レる^ハ

い^ハと^らけ^レる^ハと^らけ^レる^ハ

盛^トく^レと^らけ^レる^ハ

あ^ハま^ハく^レと^らけ^レる^ハと^らけ^レる^ハ
夕^ノ穿^レれ^ルと^らけ^レる^ハ

三^本丁^ノと^らけ^レる^ハ

姫名おはなすりと4丁へおまはる

ぬい

たさくぬいひんし

^秘内大臣河

孝子にまじりておまはる

はなれはらり河まじりておまはる

あ

^秘文孝乃河まじりておまはる

同繪合よ源の流すよと内大臣

乃思ふん

私繪合巻

一

かきとみたまいさるるはかりあんと

つ録よ六原も文多子乃さしかりし何ま

れより夕事よ八原と字同を原

八定て子細多し一も

と記しくハとりきり

笛とすも先人としてくれり

少魚の録ありとありしハ

何 向子期思旧賦序曰隣人有吹笛者

声寒亮追想曩昔游詠之好

文選才六
六臣注

木とくくうーおとくーくーく

秘 けりきき拍子よハあて橋前を

うらたはくみ成へー

花 けくくうートウリ何三モさくし

笏拍子

笏ニとりて拍子うてふの事く

何くも御遊をし何り時ハかくる威人

乃笏をとりて我笏とて打の

あり致仕の大宮乃由あり事あり

ハタシておてとれ并とていぬ一筋の
用えよ乃くうと

その時ハ扇なりと打あすといと
らりーに准ーてりるよや

私ゆーらりーらりーらりーとあり
なりー

萩う花をわち

更衣 催馬用品

催る用品更衣衣衣とてんりうおの

原三れらう萩う花をとり

花鳥の況を面白ー

今案冠者れ君乃にはさきの色と

久新り人事と思ひよせて大宮御

前よとてときう衣くれあとうい

のみ

大敵を

萩大敵は波江の表とてまうし事

秘 萩鳥放大敵ときいゆらとて只海軍

たそいで新めりやうにて

秘 内大臣

大宮乃内あといかりのふやうにては
ふれ多(海)かへー

志れひて人よおれあふとて

并 内府の女をよにみそくとれあふ

よりゆりへとて

秘 内大臣乃ゆりへとて身雲の居あふとて

かーこりり多と

内府乃うー海といふ詞

おまてふれ事いであら

すくふなふ事や

秘 内とてよふめりひり事乃いとい

ぬーといと

こよーあといふ

明君、知臣、明父、知子 史記 擇子莫如父

擇子臣莫知君 左傳

知臣莫如君 知子莫如父

日本紀

知子莫如父

昭十三

文めいま部

大孝子莫如其父

悪

はらうふ

とりはらうひははする

はまはよ思ひうぬ事よははし新

内大臣の 夕宵と雲井の居と

の事や

をとせせておほひぬ

内大臣の只今よりおほく

敵ハ今こそいそぎせ新をれ

海りよりよきまの勢とんてひき

はあてそくよ内府の海りより

つまハ只今いそぎよりおほく

ははけ

あぬたよりあつまひ

内府のいほくの海より

とらはらうとんいそぎよき

はらうとんいそぎ

ゆめさつとせれんてハ

雲井は居の事なといひしに
くはされ君乃おりしは

くさきあましは府と夕雲
くしてききしはあましは
うとさうらうらうらうらう

くさきあましは府と夕雲

くさきあましは府と夕雲
くさきあましは府と夕雲

内右居の公

あまき事ふハ何し秘

夕雲と雲井は居といひしに
てハありしに

あまき事ふハ何し秘

あまき事ふハ何し秘

あまき事ふハ何し秘

秘 秋好まは居れしにけは

ととらるるをへんかといふ

こころいふたよほらう

若き世も人もほらう半はらへ
らんと思ひしや

殿乃市井れ大さるら

原と内ち居とれ申せ

ふやう乃うさふてい

繪合乃時りもの事な

ほらめらうよと

内府れ世よかあるあし

大宮とさあり乃き一ははは後人お

とらふなうくわらうーあははははは

よとほらせて人あふんと

これよと内ち居れあうらうあし

さてわかれのりきしむるに
移しとて心うらやまを
去りしものさぬと袖うら
のんぬりし此後ゆきよ
私先ハハハハハハハハハハ
大宮もきしむるに
身ともしむるに
あんとしむるに
と移しとて心うらやまを

さしむるに
後ふらむに
あられけ美心好や

すうしおしり

何 雄拔 日本紀 麩

私云阿まやくとハ鮮字より言え物

乃かしくしりハあさやうぬを

私 けりしけぬてハ男

しり

或かとおわてあううなるぬ

く尖意ありぬし流すてハ男

くしりしりてハあまむけぬ

二日うり何そそきり多り

大まおひらうし内をばおしり

きりふきり多し

秘 細しははりりりりハ大宮

しり

何 あはひしり

何 厄額 秘 け厄のしり

はがあしり

并 ままとしりし流しりりりりり

ほうごがみとよせらる御はくしよ
むいほれ字と屋りけり

あつたあつた

^秘 日ち居る河

よかぬ抱りうとよて

^秘 姫若由よちまふとむし事た

てまぬうと

かうと思ふ行へると

しハ何と貪若と後とるのうを

と腹まてうけやりま満よれ後
る河く

宮まあり一多の御はくはるをさむ
大文乃川はくろひ多うはくの
妻とるは自も紫さふとハ
河ま何られ多の御はくは成へ

いあうなる事

^秘 大文乃河

心よいてハ

隔公子細出未ぬらん

何すらんいとわづらひと

大喜乃由事とささけりておのゝ

す門ち居乃ゆへ

多れも一死流くけよ

私 門ち居河へ

たされま物と

秘 いめ若と何るけりもさきつり

るりくハ沖へ

結句内存ハや并れ居乃らむ

一ととく

海川めふらうまきしらひなとはら

一ととぬ

二とと殿乃事へ

何りとも人ともさ

や并居るとい大文へららぬをさ

やぬ人たまかいうそ

私 源氏乃若れ事へ

天下無双乃有誠之原并夕弟也
ていつわ

私乞ハ華族乃ともれり事とん究
志すしふほしよかぬハ

夕弟君を門下居の母と申おいは
ふらふと云

あハ付けき
淡付けをえ淡くふんをた
まひハ教ふぬ人ふあふ

那うらうわ乃ほしふとけぬ

私ガれ中にてさうけとるまふ夕弟とを并
居しハいこぬとら

う乃人れ出ぬあにこ

夕弟乃ふあふも捨へうぬ

ゆありしはひ福らけぬ

秘 久付けをなまこりや

おしこまきこたぬとあ

源乃流心と察しての流を捨余

とハ是きこ

かゝる事みんとて行く世路をいひしよ
てお

ほれれとてさうしてふらふとて
らよとてさうしてなるは父あつたが
ま事成ともはとをわすれし
ゆてさういふ事かすすし
ゆ

ゆーけり何事

けとてさうしてある事と云く嫁妻候
式をたのむとていつてあひて

たさかなさういふれをよゆうせて御ん
くれちひり

やと井夕身乃をよゆうせてさう候
ふて大まれたりつるは曲とる
うみちも候ふとてさういふ
とあよ何事いふ

ゆあをさきあり候いぬ

秘 大宮

けみさういふ事いふ

大宮洞

けふいしあおまきいしあひあひ

^秘我しそまよへられと

ウヤリ乃半はらきまはたまの御
阿やゆらもへられと

もはらきまはたま

二人のくしと夢しやまはらして
乃まらうしやまはたまは
あし

みまきまはら

^秘い姫君とまはら行しあひは

くしあひ

公とたしあひしやまはら

くしあひ

うしあひはら

日存乃たかりしやまはたまは

とくしあひはら

おけなまはらとくしあひはら

赤子とてうねと孫の心をわびと
いれよとていふもなまじく
男女の心をいふも思ひあは
てまぬさぬさくまうとていふ
とありぬぬ事なれはれはれ
はてまぬれうの事
これありぬぬ事なれはれはれ
まじく
まじくぬ人なりとていふ

和 柏木 篋日記

ちとむとれはつとていふ
篋内太長と和琴ノ上を由上より
みとのうらよめは孫とていふ人
源の初むとていふ事 和同篋日記 一版
むとていふ柏木下見才ノ事ナリ
テ急せやせこしの心ニテ
リてはれぬとていふ事ナリ
こしの誰モ安トヤメ給ハス

ありての如く篇中に飛中おん
らんにとわらぬく解そん、メシ年
身けらる親身いといふにめく
つらきもやうに（中）ト云界つて
えさせたりトいふにわらうらうら
人のうらやまにこころ
見らるのうらやまに飛中おん
妻の玉うらうらに律の解の如く
いかに月をこころに
初益え篇中いふに
あひやんはは

源のりし解しはらうといふ
こころすうらうら
（中）ニト今わらうら
取らしはは
裏の如く梅もいふに
フトンひうらうら
以上等々

さう月を

秘

盃かゝればはのそよ実なるも
とふそはゆのありては

急いおほのつひ

荒

より光るむとこやとも酒のそ
ちれすうにあう志あやと

舞

玉うすの事とりや見れば君を
よかろういつてまうあこころ
これの始君とわかれとさうま

むめ君と

美

わうう

あつしこころ

舞

らわれの移りまをれあわれ
さうさうさう

秘

あつし力字の移りさ
常あわれめても有

美

あつしこころの移りま
あつしこころの移りま

かしと云ふ時ハ常ノ象ニ此ノ事ハしナト
云ク又常ノ象シニテモ凡ハシ

多ク其ノ中此ノ事アリ

新末津井ノ事ハ凡才ノ所及ナク
こし中由

その事ハ何ト云ハレト年ナクモ

事ハ何レハ凡才ノ事ナクモ凡才ノ事
ハ凡才ノ事ナクモ凡才ノ事ナクモ
凡才ノ事ナクモ凡才ノ事ナクモ

〜〜〜

かけ〜〜〜

栢木并ハ何レノ事ナク

こノ中由

栢木ハ 花ニ若相如琴ノ事ナク

年文君ノ挑事アリ今栢木ハ

凡才ハ凡才ノ事ナク凡才ハ

ナク凡才ノ事ナク凡才ノ事ナク

スニヤ

秘 昇

以中ぬ志のしりもり人へ

柏木く花鳥云司馬相如の琴の

挑事と記すりおろし

ささけさるるの琴乃折く

花 字

くハ木此中おのしりく此志とわ

しりしとあつ事と志とて

心けけて和琴とひささるる

う心は升てよ志如ひりす

心とていさくれとて料飲して

おさく心けてとてわらさる

とさう昔司馬相如の琴と

て卑文君の心ととてさる

しのお如りもて人かひさる

とああや

松勅相如昔挑文君得莫使着中

子細聴

司馬相如の文君と挑事し作し

詩くあつ初よみ中のさるる物

此録安んく人々ありしり
面印也



